

日韓兩言語漢字音の對應關係*

李 羲 斗

(圓光大學校)

Lee, Hee-Doo. 1997. A Correlation of Chinese Characters in Japanese and Korean. *Linguistics*, 5-1, 185-196. It is uncertain that when, Chinese characters were transmitted to Japan, but it is clear that it has something to do with the root of the introduction of Buddhism. Since Chinese characters were transmitted through the Backjae Dynasty, it seemed that they had a great influence on the pronunciation of Japanese-Chinese characters. The pronunciation of "oh" among Japanese-Chinese characters shows some correlation in Korea, especially in pronunciation beginning with "m" line. Even there are regular correlations between the pronunciation of "ha" in Japanese and the pronunciation of "ba" in Korean. The pronunciation of "ai" in Japanese is correlated to that of "e" in Korean, and also, the final consonant shows common correlation between Korean and Japanese (Wonkwang University)

1. はじめに

日本と韓国にとって、中國から漢字文化を受容したということは、文化的に大きな意味を持つのである。漢字文化の受容を通して、兩言語に具體的・抽象的な表現に大きな影響を与えたと思うのである。一方、日本に傳來した漢字文化自體も日本語に適應するようにいろいろな變化をとげたのである。漢字・漢文・漢語の日本化がそれである。

韓国においても、中國から漢字文化が流入され、韓國語の音韻體系に合わせて調節され、韓國語の内部で各種の變化をとげた結果が今日の韓國語體系を形成してきたと思われるのである。

漢字は中國で作られた中國の漢字であるとしても、それを受容した諸言語の違う價值體系によって、それに適合した新しい子音體系を形成してきたのが一般的である。従って、この漢字が日本に入ってきては、日本漢字音を形成し、韓国に入ってきては、現代の中國で使われているものとは違う韓國漢字音を形成したのである。

*この論文は、1997年圓光大學校の學術研究費の支援によるものである。

ここでは、日韓漢字音において、對應可能性があるいくつかの音を中心に考えてみたいと思うのである。まず、漢字音の對應關係を知るために、日韓兩言語の音の構造について分からなければならないのである。

日本語の五十音図は、五つの母音と七つの子音によって作り出された音節である。基本子音のうち、平音が(カ、サ、タ、ナ、ハ、マ、ラ)の七行音が、濁音が(ガ、ザ、ダ、バ)の四行音、また半濁音(パ)行音が一音あって、実際には合せて、子音十二行音と母音五音の組み合わせによって成り立つことばである。

これに比べて、韓国語は(ア、イ、ウ、エ、オ)の他に、さらに母音が二つ多くあって、合わせて七つの基本母音があり、子音は、日本語の平音と全く同じ音である(カ、サ、タ、ナ、ハ、マ、ラ)の七行音と、濁音(バ、ザ)の二行音、そして、半濁音(パ)行音の他に、激音(口の中で息を溜めて一気に激しく破裂させる音＝日本語の半濁音にあたる)が四音、濃音(喉の奥で緊張を保ちながら濃縮させて出す音)が五音あり、合せて十八の子音がある。従って韓国語は、日本語よりはるかに多い音節を持っていることばである。

しかし、古い日本語には、現在よりも母音が三つ多い八母音であったことが確認されている。そして、奈良時代の古事記の發音を調べて見ると、現在の五十音よりも三十八音多い八十八音を使って、日本語が話されていたことが分かってきたのである。

韓国語の音の構造は、中國語と日本語の音の特徴を合わせ持っていることばである。

中國語の基本的發音は、濃音と激音の對立によって成り立つことばであるが、日本語の基本的音は、平音である。韓国語も、發音の基本的要素が平音であり、その上に、濃音と激音を持っていることばである。

2. 漢字の傳來と漢字音

日本列島に、いつ頃から漢字が傳來したのかは、確かではないが、百濟「王仁」が四世紀頃、日本に「千字文」と「論語」を伝えたという記述が日本書記に語られている。

「一六年春二月に、王仁來けり、則ち太子菟道稚郎子、師としたまふ。諸の典籍を王仁に習ひたまふ。通り達らずいふこと莫し。……是歲、百濟の阿花王薨りぬ。」

漢字の傳來についての公式記録は285年頃の「古事記」に書いてある。

「また百濟國主照古王，牡馬壹疋，牡馬壹疋を阿知吉師に付けて貢りき，……また百濟國に，若し賢人あらば貢れと仰せたまふ。かれ命を受けて貢れる人，名は和邇吉師，則ち論語十卷，千字文一卷，併せて十一卷を，この人に付けて貢りき」

しかし「千字文」が作られたのは，六世紀頃の梁の武帝(502～594)の時代であつて，四世紀でないことは，間に合わないことになるのである。

しかし，漢字の傳來の日時を特定してもあまり意味はないだろう。すでにそれ以前に漢字が潛入していたということは明かである。

それは日本で239年の銘の入った三角縁神獸鏡が発見されていることからもう明かになつたのである。また，北部九州の奴國王が光武帝から金印紫綬かり，後漢の冊封體制に入つたのは57年のことである。當時すでに，北部九州に漢字文化が傳來していた可能性が高い。

いずれにしても，日本に漢字が傳來したのは，韓半島からであり，しかも佛教傳來のルートと深い關係を持って伝わつたことは，確かであると思われる。

日本の漢字音は，七世紀頃を境にして，それ以前の漢字音と，七世紀以後では，漢字の読み方に大きな變化があつたと言われている。

吳音は，佛教書籍に書かれている漢字音の読み方と深いかかわりを持つている音であり，韓國から伝わつた漢字音であると言う意味で「クレ(句麗=韓國の高句麗)」の音であるとも言われている。

日本語で「吳」を「クレ」と讀んでいるのと深い關係を持つているのである。

日本に佛教が伝わつたのは，五三八年であると言われているが，韓半島の百濟ではAD八四年には，すでに佛教が伝わっており，日本の飛鳥文化に大きな影響を与えているのである。しかし，日本にも六世紀以前までには佛教が信仰されていると思われ，七世紀以前までには佛教書籍を通して廣まつた漢字音が吳音と言われている。

「古事記」や「万葉集」の万葉仮名は吳音資料として有名である。これらの仮名には，カ行音に「訶(カ)」や「許(コ乙)」など，原音でh-系聲母をもつ字も用いられており，和音に基づいていることが分かるのである。當時の万葉仮名は一般的に吳音系の和音に基づいているのである。

漢音は，日本の大化の改新(六四五年)を前後にして，中國の唐の都に留學していた學問僧の手によって，日本に伝わつた音であると言われており，中國から傳來した思想書や文學書の中で廣く讀まれている音である。

日本の漢字で「馬」や「美」などは，二つの読み方を持つている漢字である。「馬」は「マ」とも讀み「バ」とも讀むのである。また，「美」という漢字は

「ミ」音でも「ビ」音でも讀まれている。この二つの読み方の違いは、ことばの最初の部分が、マ(ma)行音で讀むか、バ(ba)行音で讀むかの違いであり、すなわち子音のm音とb音の違いであることがわかる。従って、吳音というのはマ(ma)行音で讀まれる漢字音であり、漢音はバ(ba)行音で讀まれる漢字音である。

韓國語の漢字音では、大部分がマ(ma)行音で讀まれており、日本の吳音と深い関係にあるのである。しかし、吳音と漢音の違いは、マ(ma)行音にだけに現われる現象ではなく、n行音やr音、惑は母音の中にも多く現われるものであるが、今日は紙面の制約上、省くことにする。

漢 字	吳 音 (韓國語)	漢 音
馬	マ	バ
武	ム	ブ
美	ミ	ビ
無	ム	ブ
木	モク	ボク
万	マク	バン
幕	マク	バク
暮	モ	ボ
文	モン	ブン
米	メ・ミ(マイ)	ベイ
目	モク	ボク

3. 「アイ(ai)」音と、「エ(e)」音の對應關係

日本語のアイ音が、古くはエ音で發音されていたのではないかという疑問を持ったのは、山陰地方に出かけた數年前のことであった。

山陰地方では、「早くしなさい」とことばを、「早くしんせ-」と言って、ことばの終りを、「さい」(sai)とは言わず、「せ-」(se)で言ったので、韓國南部で育った私の耳には、ある程度耳慣れたことばであった。そして、これが母音ai音とe音の違いによって生じた音節であることが分ってきたのである。

韓國語で、「子供」のことを「アイ」と言っても「エ」と言っても同じ意味

を表わすことばであり、また「間」の意味を持つ韓国語を「サイ」と言っても「セ」と発音しても意味が変わるということばないのである。ai音が古くはe音であったと思われるもう一つの理由は、純粹の日本語の発音は、ai音のように、母音が連続してあらわれる音節を持っていないことばであると言うことである。

ai音がe音になる方言を、さらに詳しく調べてみると、江戸辯で「大工」(dai-ku)に発音が(de-ku)で発音されており、「最後」(saigo)が(se-go)に発音されているのも、母音ai音がe音になっている現象である。

また、沖縄を中心とする琉球方言でも同じようにai音がe音であらわれているのである。沖縄では「挨拶」(aisatsu)がエ-サチ(e-satsi)に発音されているが、日本人には「エ」よりも「イ」音に近い発音の「イ-サチ」に聞こえているようである。

日本語で返事することばとして、「はい」ということばと、佐賀懸方言の「ない」があるが、韓国の方言では、「へ-」と「ぬ」と発音されており、これも母音ai音とe音の違いによって生じたことばであると言うことができる。そして、このような現象を、言語の歴史的背景から考えて見ると、七世紀以前にはe音であったものが、大化改新前後に中國の唐に留學していた學問僧の手によって、これまで日本人が話していた発音と違う母音連続の中國北方音であるai音を、日本に持ち歸つて、都では母音が連続して現われる発音が廣まるようになり、方言では純粹のe音が残って、発音の二重構造が生じたのではないかと思われるのである。

母音が單語の中で連続して現われることを嫌うのは、韓国語のひとつの特徴でもあり、韓国語が六世紀前後から、中國音の影響によって、純粹の韓國音と、新しく身につけた中國音が同棲するようになって、韓国語にもai音とe音が、しばしば同じ意味を現わすようになったのかも知れない。

さらに、日本語のai音が以前にはe音であったことを示すよい例として、片假名の「ケ」と「レ」をとり上げることが出来る。片假名が「ケ」は「介」の漢字をくすして作った文字であるから、片假名が作られた當時には「介」(kai)が(ke)音で讀まれていたことを示すなよりの證據である。また、片假名の「レ」は、漢字「禮」の後の部分をとって作られた文字であり、讀み方は、後には二つが生じて「ライ」(rai)と「レイ」(rei)と讀むのであるが、片假名が作られた當時は「レ」(re)音で讀んでいたことが分かるのである。

韓国語では、現在でも「介」も「ケ」音で讀み、「禮」を「レ」音で發音しているのであって、ここにも、日本語と韓国語の音の深いつながりをかいま見ることが出来るのである。

また、「愛」の漢字も昔の日本語でも「エ」音でも讀まれていたことが、地名の「愛媛縣」「愛知川」などを見れば明らかである。「愛」(アイ)の韓國語

の音も昔の日本語と同じく「エ」音で讀んである。従つて、日本語の漢字音におけるai音は、韓國音では規則正しくe音で對應することが出来るのではないか思ふのである。

漢 字	日 本 語	韓 國 語
愛	アイ	エ
介	カイ	ケ
改	カイ	ケ
開	カイ	ケ
財	ザイ	ゼ
内	ナイ	ネ
大	ダイ	デ
代	ダイ	デ
待	タイ	テ
貸	タイ	テ
對	タイ	テ
來	ライ	レ
哀	アイ	エ
每	マイ	メ

4. 「ハ(ha)」行音の對應關係

日本國語大辭典(小學館)では、清音と濁音との區別は、上代からあつた。半濁音が、これらのほかにあつたとは認められない。しかし、清音の「は」を表わす漢字の字音としての性質や清濁對應の様子から見て、むしろ清音の「は」の子音が、濁音のbに對して、古くはpであつたと書いてある。また、日本の國語學者上田万年は、その著「P音考」の中で、日本語のハ行音は平安時代頃まではバ行音であつたものが、時代の推移と共に、くちびるが次第に緩むことによつて生じた音であると説いている。そして、さらにさかのばれば、ハ行音がバ行音であつたことを、日本語の方言を取り上げて、檢證しているのである。

沖繩地方は、古い日本語の發音を、よく保っている地域であるが、その中で、八重山列島には、現在のハ行音が、バ行音で話されていることが分かったのである。

八重山では、「鼻」の發音が「ハナ」とは言わず「パナ」と言っており、また「蜂」は「ハチ」ではなく、「パチ」と言っているのであるが、さらに漢字音のハ行音の読み方についても、同じようなことが、規則的に對應出来るのである。「發達」は標準語では、「ハッタッ」と讀んでいるが、沖繩では、ハ音がバ音になり、ツ音がチ音になって、「パチタチ」と讀んでいるのである。

このような現象は、現在ハ行音で讀まれている日本語が、昔には、バ行音で讀まれたか、惑は、さらにさかのぼっては、バ行音で讀まれていたことを意味するのである。

では、このような日本語の音の變化と韓國語の音は、どのような關係にあるのかについて調べて見ると、日本語のハ行音を、バ行音か、バ行音に戻すことは、また韓國語の發音に戻すことにもなるのである。

日本語で「光」を「ヒカリ」と讀むのであるが、これを「ピカリ」と讀めば、同じ意味をあらわす韓國語になるのである。

また「負」は「オフ」と讀んでいるが、フ音をブ音に直して「オブ」といえば、韓國語では背負うことを意味することになる。

これをさらに漢字音にあてはめて見ると、日本語のハ行の漢字音は、韓國語ではバ行音の「bu」であり、また「保」は韓國語では「bo」音で讀んでいるのである。

「不」の漢字は、日本ではハ行音の「hu」で讀まれているが、韓國語ではバ行音の「bu」であり、また「保」は韓國語では「bo」音で讀んでいるのである。

このような現象は、漢字音の一部にだけあらわれる現象ではなく、日本語と韓國語のあいだに規則的對應を示すのである。

従って、日本語のハ行音が、古い時代にはバ行音か、バ行音であったとすれば、日本語と韓國語のあいだにおける、ha行音、ba行音、pa行音は、韓國語の音と深いつながりの中で發展していった發音であると言わざるを得ないのである。

漢 字	日 本 語	韓 國 語
反	ハン	バン
半	ハン	バン
班	ハン	バン
秘	ヒ	ビ
比	ヒ	ビ
非	ヒ	ビ
肥	ヒ	ビ
貧	ヒン	ピン
父	フ	ブ
夫	フ	ブ
婦	フ	ブ
保	ホ	ボ
報	ホウ	ボウ
宝	ホウ	ボウ
備	ヒ	ビ
費	ヒ	ビ
悲	ヒ	ビ
負	フ	ブ
判	ハン	パン
倍	ヘ	ベ

5. 子音「ツ」と「チ」音, 「ク」音の對應關係

終聲子音とは, 日本語で二音節で讀まれる漢字音の最後の音節のことであるが, 韓國語では, これをパッチムと言っている.

例えば, 「骨」の漢字は「コル」で讀まれているが, この場合, 二音節目の「ル」を持って終聲子音と言っているのである.

終聲子音は, 中國音の影響によって, 生じた音であると言われており, 韓國人が自國の音の一部として, 完全に消化するようになったのは, 韓國文字のハングルが作られた以後のようである.

日本の「ツ」(tsu)音は, t音から變化して生じた音であり, 現在でも中國の揚子江地域では, 原音のまま使われていると聞いている. しかし, この原音は, r音のかかったt音であると言われており, 日本語や韓國語には元來, そのような音がなかったため, 韓國語では, r音(l音と音價は同じである)で表記するよ

うになり、日本語では音が變化した「ツ」(tsu)音で表記するようになったのである。従つて、日本の漢字音の「ツ」音は、韓國語では「r」音であらわすようになり、現在でも規則的對應を示しているのである。

例えば、漢字の「密」は「ミツ」と讀まれているが、二音節目の「ツ」音を「r」音に換えて「ミル」と發音すれば、韓國音になるのである。これは、「ツ」音にだけあてはまる現象ではなく、「チ」音についても同じである。漢字音「吉」の讀み方は、「キチ」であるが、「チ」音を「r」音に直して「キル」と言えば、韓國語になるのである。

漢字「發」の讀み方は、「ハツ」であり、韓國語では、「ハル」と讀みたいところであるが、漢字語の一音節目の「ハ」音は、韓國語では「バ」音でよくあらわれると言うことは、前述した通りであり、「ハ」音を「バ」音に直して、「バル」で讀めば韓國音になるのである。

また、「達」の漢字音は「タツ」であるが、これは「ツ」音だけを「r」音に換えて「タル」と言えば韓國音になり、發達(ハツタツ)という單語は、韓國語では「バルタル」と言うのである。

これを表で示すと次の通りである。

漢 字	日 本 語	韓 國 語
骨	コツ	コル
吉	キチ	キル
末	マツ	マル
達	タツ	タル
殺	サツ	サル
逸	イツ	イル
一	イチ	イル
發	ハツ	バル
八	ハチ	バル
仏	フツ	ブル
渴	カツ	カル
密	ミツ	ミル
堀	クツ	クル

ク音をローマ字で書くと(ku)になる。日本語で二音素で讀まれる漢字音の最後がク(ku)音で發音されるものは、韓國語では(ku)音のうち、最後の「U」音を省けば、韓國語になるのである。

例えば、漢字の「角」は「カク」(kaku)で読まれるが、二音素目のku音のうち「U」音を省いてkak(カク)で読めば、正しい韓国音になるのである。これも、日本語と韓国語のあいだに、規則的に対応するので、表は次の通りである。

漢 字	日 本 語	韓 國 語
角	kaku	kak
各	kaku	kak
閣	kaku	kak
落	raku	rak
樂	raku	rak
惡	aku	ak
着	chaku	chak
屋	oku	ok
藥	yaku	yak
穀	koku	kok
卓	taku	tak

6. 終聲子音「ン」音の對應關係

韓国語には、漢字音の最後が, p, t, k, で終わるものと, b, d, gで終わる子音があり、鼻音系列では, m, n, ㅇで終わる子音がある。日本語は、これまで、ことばの最後が子音で終わる単語はなかったと言われているが、厳密に言えば、それは誤りである。

子音で終わる単語がなかったのではなく、子音で終わる単語を表記する文字を持っていなかったためである。

日本語の終聲子音を表わす唯一の文字は、鼻音系列の終聲子音であるm, n, ㅇをあらわすものとして「ン」という文字があるが、これも、平安時代にはなかった文字であり、室町時代に作られた文字であると言われている。

日本の漢字音が、千數百年のあいだ、韓国からはいった漢字音に大きな影響を受けていながら、読み方が多少違ってきているのは、終聲子音を表わす文字を持っていなかったことが大きな原因である。

例えば、鼻音系列の終聲子音ㅇ音について調べて見ると、平安時代頃には、すでにㅇ音が、ことばの上では使い分けられいたが、ㅇ音の表記文字を持っていなかったために、表記の上では省かれて記されていたのである。

韓国語で、ことばの最後がㅇ音であられる漢字音としては、東(トウン)、動

(ダウン), 工(コウン), 公(コウン)などをあげることが出来るが, 日本では「ン」音の表記法が作られる以前に日本にはいった音であるために, 「ン」音を省かれたまま東(トウ), 動(ドウ), 工(コウ), 同(ドウ), 公(コウ)のように讀まれて, 現在に至っているのである。

また, 韓國語で, 相(サウン), 講(カウン), 當(タウン), 江(カウン), 郎(ラウン)と讀まれた漢字も, 日本では室町時代初期頃までは, ことばの上では韓國語と同じく讀まれてきたのであるが, ㄱ音をあらわす表記法を持っていなかったために, 「ン」音が省かれたままの韓國語である。相(サウ), 講(カウ), 當(タウ), 江(カウ), 郎(ラウ)音で讀まれていたのである。昭和21年の現代かなづかいの施行令によって, サウ(相 = sau), カウ(講 = kau)の音が, 母音が連続してあらわれる音を, o音の長音に換えて, auの音が ō音で表記するようになり, (sau)音が(sō)音になり(kau)音が(kō)音になって現在に至っているのである。

しかし, 音節の構造が全く違う中國語の音と, 日本語の音を直接引き比べれば, このような音韻の現象は, 全く起こらないのであってその意味で韓國の漢字音に與えた影響が, いかにかいものであったかを知ることが出来るのである。

7. おわりに

日本に漢字がいつ頃から, どのような形で伝來したのかは, 確かでないが, 百濟からであり, 佛教伝來のルートと深い關係があるとは確かである。漢字が百濟を通して日本に渡ったため, 日本の漢字音に与える影響は大きいのである。前述したものをまとめてみると次のようである。

日本語の漢字音の中で吳音は, 韓國語の漢字音といくつかの對應關係が見られるのである。特に, マ(ma)行音で始まる音では對應關係が多く見られるのである。

日本語の「アイ」の漢字音と, 韓國語の「エ」音の漢字音においても, また, 日本語の「ハ」の漢字音と, 韓國語の「バ」の漢字音のあいだにも, 規則的な對應關係を示すのである。「ハ」行音の變遷過程とも關係があるらしいのである。

子音「ツ」音は, 中國語の影響によって, 生じた音で, 日本語と韓國語に元來, そのような音がなかったため, 韓國語では, r音で表記するようになり, 日本語では, 「t」音から變化して生じた「ツ」音で表記するようになったのである。日本の漢字音の「ツ」音は, 韓國語では「r」音で表すようになり, 現在でも規則的な對應關係を見せているのである。また, 終聲子音「ク」においても, 日本語では2音素で讀まれる漢字子音の最後が, 「ク(ku)」音で發音され

るものは、韓国語では(ku)のうち、最後の「U」音を省けば、韓国語の漢字音になるのである。

韓国語で、言葉の最後が -ŋ音で現われる漢字語としては、東(トウン), 工(コウン), などを挙げる事が出来るが、日本では「ン」音を省かれたまま東(トウ), 工(コウ)のように讀まれているのである。

以上、おおざっぱに、日韓漢字音において、對應可能性のあるものをいくつか調べてみたが、今後、日韓漢字音に関する資料の他にも、北京語音や現代北部中國語音も活用すれば、日韓中の音韻史は、より精密に迎れるようになるのである。

參考文獻

- 藤堂明保, 1974, 「漢語と日本語」, 東京, 秀英出版
 野村雅昭, 1983, 「漢語の問題」, 「日本語學」, 明治書院
 築島裕, 1985, 「和語と漢語」, 「日本語學」, 明治書院
 志部昭平, 1987, 「朝鮮語における漢字語の位置」, 「日本語學」, 明治書院
 飛田良文, 1985, 「中國語と對應する漢語」を診断する, 「日本語學」, 明治書院
 河野六郎, 1968, 「朝鮮漢字音の研究」, 天理時報社
 沼本克明, 1986, 「日本漢字音の研究」, 東京堂
 中澤希男, 1987, 「漢字・漢語概説」, 日本教育出版社
 眞武直, 1969, 「日華漢語音韻論考」, 櫻楓社
 湯澤質幸, 1987, 「唐音の研究」, 勉學社
 築島裕, 1964・1986, 「國語學」, 東京大學 出版部
 小川環樹, 1977, 「中國語學研究」, 創文社
 俞昌均, 1980, 「韓國古代漢字音の研究 1・2」, 啓明大學出版部
 金東秀, 1982, 「漢語と和製漢語・漢字語に関する考察」, 韓國外國語大學院
 南豊鉉, 1993, 「國語史 史料로서의 三國史記에 대한 檢討」, 「三國史記의 史料的 檢討」, 韓國精神文化研究院
 辛容泰, 1988, 「原始 漢・日語의 研究」, 동국대 출판부
 宋基中, 1992, 「現代國語 漢字語의 構造」, 한국어문(한국정신문화연구원)
 李崇寧, 1955, 「新羅時代의 表記法 體系에 관한 試論」, 塔出版社, 1988年版

李 義 斗

570-749 全北 益山市 新龍洞 344-2

圓光大學校 師範大學 日語教育科

E-mail: hello@educa.wonkwang.ac.kr